

令和 5 年 6 月 7 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19H01756

研究課題名(和文) 認知的スキルと社会情動的スキルの統合的介入方策の開発と評価

研究課題名(英文) Development and Evaluation of Intervention Strategies Integrating Cognitive and Socio-Emotional Skills

研究代表者

深谷 達史 (Fukaya, Tatsushi)

広島大学・人間社会科学研究科(教)・准教授

研究者番号：70724227

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 6,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、「失敗を次の学習に活かす」などの学習行動に着目し、2つのスキルを統合的に扱う介入方法の開発と評価を行った。具体的には、「学習のやり方を工夫し失敗をふり返ることで、苦手を得意にできる」と社会情動的スキルの一つである成長マインドセットに基づく働きかけを行うとともに、教訓帰納という認知的スキルを教授し、効果を検証した。また、公立中学校で、統合的な実践を展開しその有効性を評価した。主に認知的スキルを学習する教科指導において、社会情動的スキルを学ぶプログラムを行う効果を検証した。その結果、社会的能力を表す尺度のみならず、全般的な学習適応や自己調整を表す尺度においても得点の向上が認められた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究を通じて、従来別々のスキルとして扱われることが多かった認知的スキルと社会情動的スキルを統合的に指導する有効性を検証できた。この点には高い学術的なオリジナリティが存在するといえる。また、本研究で行った介入は、汎用的な資質能力の育成が求められる学校教育に対しても直接的な示唆を与えるものである。特に、個人での学習を行う活動のみならず、他者とのやりとりを行う活動においても介入の有効性が認められた点、特定の活動に対してのみならず全般的な学習適応感の向上などの成果が得られた点は、研究成果として特に意義深い点だと考える。

研究成果の概要(英文)： In this study, we focused on learning behaviors such as "applying failures to the next learning experience," and developed and evaluated an intervention method that integrates cognitive skills and socio-emotional skills. For example, we conducted an intervention based on the growth mindset, which is one of the socio-emotional skills ("by thinking learning methods and reflecting on failures, students can make their difficulties into strengths), and taught the cognitive skill of lesson induction. In addition, we developed an integrated practice in a public junior high school and evaluated its effectiveness. The effectiveness of a program to teach socio-emotional skills was examined in a subject teaching program in which mainly cognitive skills were learned. As a result, improvement in scores was observed not only in the social skills scale, but also in the general adaptation to learning and self-regulation scales.

研究分野：教育心理学

キーワード：認知的スキル 社会情動的スキル 統合的介入 メタ認知 実践研究

1. 研究開始当初の背景

「知識基盤社会」とも呼ばれる社会のあり方の変化に伴い、教育で培うべき学力像にも変化が生じている。心理学の知見ももとに、柔軟な思考を可能にする構造化された知識を習得するとともに、様々な状況で活用可能な汎用的な能力(コンピテンシー)を育成することが、日本、そして世界各国で重視され始めている(文部科学省, 2017; Rychen & Salganik, 2003)。

中でも、近年特に注目されているのが、認知的スキルと社会情動的スキルの2つである。OECDの報告書(2015)では、認知的スキルとは、知識や経験を獲得する心的能力と定義される。ここには、構造化された知識や学習方略などが含まれる。他方、社会情動的スキルとは、他者との協働、感情の制御、目標達成への意思などに関するスキルを指す。認知的スキルと社会情動的スキルは、学業達成や教育の修了、失業率や就労後の所得、健康といった幅広い指標に影響を与えるため(Heckman et al., 2006; 2014)、その育成が重視される。

ところが、認知的スキル、社会情動的スキルそれぞれに対する介入はこれまで行われてきたものの(e.g., Durlak et al., 2011; Rittle-Johnson et al., 2017)、一つの介入の中で両者を統合的に扱う介入は十分開発が進んでこなかった。例えば、学習経験を振り返りなぜ失敗したかを考える重要性が指摘されるが(Ellis & Davidi, 2005)、振り返り行動を促す際、学習方略に関する知識を明示的に教授するなどの認知的スキルへの働きかけのみならず、失敗を否定的にとらえる感情的側面への働きかけをあわせて行うことが有効だと考えられる。

新しい学習指導要領では「学びに向かう力」としてコンピテンシーの育成が目標に掲げられたが(文部科学省, 2017)、指導をいかに行うかが明らかでなければ、その目標は達成されない。そこで、本研究では「認知的スキルと社会情動的スキルをいかに統合し有効な介入法を開発できるか?」という核心的な問いを設定し、学校現場での実践も含めて研究を展開する。

2. 研究の目的

研究全体の目的は、認知的スキルと社会情動的スキルを統合する介入法を開発し、実践的なフィールドも含め有効性を検証することである。これは以下の下位目的から構成される。

- (1) 「学習したことを説明する」といった特定の学習行動に着目し、認知的スキルと社会情動的スキルの両者を統合した介入法を開発し、その評価を行う(個別的介入法の開発と評価)。
- (2) 学校現場を含む実践的なフィールドで、既存の介入と新たな介入を組み合わせた統合的な実践を展開し、その有効性を評価する(実践的フィールドでの統合的介入)。

3. 研究の方法

下位目的(1)に関しては、「学習したことを説明する」、「英単語を学習する」、「失敗を次の学習に活かす」という学習行動に着目し、以下に挙げるような研究を行った。

研究1 2020年度に小学6年生5名を対象とし、「説明的文章を上手に読み、表現する」ことをテーマとした4日間の夏休み学習講座を行った(新型コロナウイルス感染症対策としてオンラインで実施)。説明的文章の学習においては、「自分は読解力がない」とできない原因を能力に帰属し、苦手意識を持つ児童生徒は少なくない。そこで、講座の中では、文章を上手に読む認知的スキルとして、文章を構造化し整理することを指導した。さらに、その認知的スキルの有用性を感じさせるため、読んだ文章をメモに整理し、メモをもとに文章の内容を他の人に説明するという説明活動を行った。この説明活動の中では、相手に考えを伝えるため、メモを相手に示しながら話している箇所を指すといった社会的スキルを合わせて教授した。講座の事前と事後での質問紙調査を通じて、説明文読解や説明活動に対する自己効力感の他、「読解力は変えることができない」といった固定的知能観がどの程度変化したかを調べ、効果検証を行った。

研究2 2021年度には、小学6年生6名に対して、「英単語を工夫して覚える」というテーマについての5日間の夏休み学習講座を対面にて実施した。単語の学習に際して、多くの児童生徒が「意味を考えずに繰り返し書く」といった機械的なリハーサル方略をとりがちである。こうした課題に対して、講座では、社会情動的スキルに含まれる成長マインドセットを涵養するため、「やり方を工夫し練習することで、苦しい英単語学習も得意にできる」と伝え、日本語に多く存在するカタカナ語を既有知識とし、英単語の発音や意味と結びつけるといった学習方略(認知的スキル)を示し活用を求めた。効果検証として、講座の事前と事後で英単語学習についての自己効力感などを測定するとともに、初見の単語リストを一定の時間で学習し記憶できたかを調べる単語学習テストを実施した。

研究3 2021年度には、小学4年生の個別指導の事例から、認知的スキルと社会情動的スキルの統合的介入が児童の変容をどう促すかをより詳細に検討することを試みた。国語の文学的文章の学習を苦手にする小学4年生に、全10回の個別的な学習相談（認知カウンセリング）を実施した。当該児童は、塾に通うなどしてたくさん問題を解くことはしていたものの、問題や自身の解答をふり返り、文章を読んだり問題を解いたりするコツを抽出すること（教訓帰納）はしていなかった。そこで、「学習のやり方を工夫し失敗をふり返ることで、苦手を得意にできる」と成長マインドセットに基づく見通しを持たせるとともに、指導者とのやりとりを通じて抽出した教訓を用いて問題解決を促し、学習方略として自ら教訓帰納を活用できるよう支援を行った。

さらに、下位目的 に関しては、以下に挙げるような、実際の学校現場やフィリピンの貧困地域における養護施設において実践的な研究を行った。

研究4 2022年度において、公立中学校をフィールドとし、主に認知的スキルを学習する教科の指導において、社会情動的スキルを学ぶプログラムをあわせて行う効果を検証する実践研究を行った。社会情動的スキルを学ぶ心理教育プログラム SEL-8S(Social and Emotional Learning of 8 Abilities at School, 小泉,2011)のうち、協働学習に有効だと思われる「他者理解」や「意思伝達」などを学ぶ6ユニット（1ユニット15分）を選定し、中学2年生のLHRにて実施した。介入を行う事前と事後で質問紙調査を行った。具体的には、社会情動的スキルにかかわる基礎的な社会的能力、理科学習における粘り強さや自己調整の他、より全般的な学業面での変化を捉えるため、学習的適応についての尺度が用いられた。

また、2つの目的に直接対応するものではないが、関連する研究として、認知的スキルと社会情動的スキルの相互的な関係性を検討するため、2次データに基づく以下の調査を行った。

研究5 PISA2018のデータを用いて、読解に関する学習方略の教授が、知能観と読解力の関係を調整するかについて検討した。具体的には、先行研究では、「自分の能力は変えられない」という固定的知能観を持つ生徒は学業成績が低いことが示されてきたが、認知的スキルの指導がこうした効果を調整するのではないかと仮説を設けた。日本の高校1年生6,109名のデータを用いて、マルチレベルモデルによる分析を行った。

4. 研究成果

以上の各研究について得られた成果の一端を示す。

研究1 説明的文章の読解と表現に対する介入を行う事前と事後において、各質問項目の平均値を算出した（表1）。なお、各質問とも5件法で回答を求め、得点が高いほどあてはまる程度が強いことを表している（研究2も同様）。いずれの項目においても事前から事後にかけて向上が認められた。特に、読解（項目2）・説明（項目3）についての自己効力感は0.6ポイントの上昇、固定的知能観（項目5・6）は-1.4および-1.6ポイントの減少が認められた。

表1 研究1における質問紙調査の結果（平均値）

質問項目	事前	事後
1. 国語の説明文を読むことが好きだ	2.6	2.8
2. 国語の説明文をうまく読める	2.2	2.8
3. 読んだことを他の人にうまく説明できる	2.6	3.2
4. 読み方を学べば自分も上手に読めるようになる	4.4	4.6
5. 私の中で、読解力はほとんど変えることのできないものだと思う	3.2	1.8
6. 新しいことを学ぶことはできても、基本的な読解力は変えられない	3.4	1.8

研究2 英単語学習において「やり方を工夫し練習することで、苦手な英単語学習も得意にできる」という見通しを持たせた上で、カタカナ語を活用するといった認知的スキルを教授する効果を調べるため行った質問紙調査の結果を表2に示した。質問紙では、「私の英単語を覚える力はすぐれているとおもう」などの自己効力感、「英単語について学習することはおもしろい」などの内発的価値、「英語の授業で英単語を教わることは大切である」などの獲得・利用価値を測定し、いずれの項目においても、事前から事後にかけての向上が認められた。また、自己効力感と内発的価値については、講座終了後の1か月後に測定した遅延時においても事前との有意な差が認められ、介入の効果が1か月後にも持続したことが示された。加えて、単語学習テストにおいても、事前から事後にかけての向上が認められた。

表2 研究2の質問紙調査の結果(各尺度の平均値,括弧内はSD)

	事前	事後	遅延
英語自己効力感	2.42 (1.16)	3.67 (0.82)	3.38 (0.94)
内発的価値	3.11 (1.03)	4.27 (0.47)	4.07 (0.53)
獲得・利用価値	3.56 (0.77)	4.44 (0.54)	4.22 (0.75)

研究3 文学的文章の学習を苦手とする小学4年生の個別指導の事例において,指導の序盤では,教訓帰納を効果的な学習法として提示するとともに,ドリルの問題や教科書の問題で指導者とともに教訓帰納を練習した。自分がどこにつまずいたか,正解に至るのにどのような読み取りが必要か把握しづらい記述問題については,指導者から児童がどこにつまずいたか,答えに至るためにどのような点に気を付けるべきかを明確化し,教訓を抽出させた。中盤では,教訓が自分の間違いに即していないなどの児童の課題に対し,よい教訓の基準を提示し,基準をもとに教訓を引き出すよう指導を行った。さらに,終盤では,教訓帰納を自らが行う学習の方法として意識化していなかった児童に対して,方略の意識化を図るとともに,授業での教訓帰納の使い方などを指導した。こうした働きかけの結果,当初意欲が低かった文章読解の学習に対して児童の意欲が高まったこと,また,教訓帰納を自らを用いるべき学習方略として意識化できるようになったこと,「失敗を活かすことは自身の成長につながる」といった学習観を持つことができるようになったことなどが確認された。

研究4 公立中学校においてSEL-8Sと教科指導を組み合わせる効果を調べるため,質問紙調査を行った。時期の効果のほかに,事前の得点をもとに群分けを行い(低群,中群,高群),両者の交互作用をあわせて算出した。その結果,SEL-8JHS尺度(小泉・米山,2020)で測定した4つの基礎的な社会的能力,6領域学校適応感尺度(栗原・井上,2010)で測定した学習の適応,中学校理科における「主体的に学習に取り組む態度」(平澤・久坂,2021)が示す理科学習における粘り強さ尺度及び理科学習における自己調整尺度について時期の主効果が認められ,事前から事後にかけての向上が示された(表3)。

表3 研究4の結果(各尺度の平均値,括弧内はSD)

	事前1回目			事前2回目			事後1回目			分散分析結果		
	低群	中群	高群	低群	中群	高群	低群	中群	高群	主効果(群)	主効果(時期)	交互作用
社会的能力	(df)									(2/77)	(2/154)	(4/154)
自己への気づき	3.45(0.54)	3.27(0.51)	3.86(0.38)	3.47(0.54)	3.27(0.51)	3.81(0.38)	3.48(0.55)	3.42(0.42)	3.86(0.38)	2.86 †	5.03 *	1.08
他者への気づき	3.44(0.55)	3.39(0.63)	3.52(0.50)	3.43(0.54)	3.39(0.63)	3.48(0.47)	3.55(0.50)	3.64(0.62)	3.71(0.40)	0.40	9.37 **	0.18
自己コントロール	2.75(0.89)	3.06(0.55)	3.00(0.64)	2.73(0.87)	3.06(0.55)	3.00(0.64)	2.85(0.96)	3.36(0.55)	3.14(0.74)	0.63	10.80 **	0.38
対人関係	2.88(0.80)	3.21(0.64)	3.24(0.79)	2.91(0.81)	3.24(0.60)	3.24(0.79)	3.01(0.82)	3.36(0.66)	3.29(0.78)	0.59	4.70 *	2.27
責任ある意思決定	3.01(0.68)	3.21(0.67)	3.14(0.72)	3.03(0.67)	3.18(0.64)	3.10(0.66)	3.12(0.69)	3.24(0.67)	3.19(0.72)	0.08	2.08	1.13
生活上の問題防止のスキル	3.69(0.49)	3.61(0.47)	3.24(0.81)	3.64(0.51)	3.61(0.42)	3.24(0.81)	3.76(0.41)	3.70(0.43)	3.29(0.80)	0.37	1.45	1.99
人生の重要事象に対処する能力	2.99(0.80)	3.38(0.75)	3.29(0.56)	3.00(0.80)	3.39(0.74)	3.29(0.56)	3.11(0.79)	3.39(0.73)	3.29(0.56)	0.38	5.91 *	0.11
積極的・貢献的な単位活動	3.49(0.43)	3.55(0.60)	3.76(0.37)	3.49(0.43)	3.55(0.60)	3.76(0.37)	3.59(0.39)	3.58(0.58)	3.76(0.37)	0.03	0.40	1.96
ASSESS	(df)									(2/41)	(2/82)	(4/82)
学習の適応	2.40(0.90)	2.87(0.98)	3.89(0.49)	2.38(0.85)	2.78(1.08)	3.91(0.49)	3.44(0.68)	3.11(0.60)	2.97(0.79)	8.61 **	0.31	5.53 **
理科学習における粘り強さと自己調整	(df)									(2/37)	(2/74)	(4/74)
粘り強さ尺度	3.09(0.65)	3.48(0.81)	3.51(0.85)	3.10(0.66)	3.45(0.76)	3.51(0.85)	3.49(0.74)	3.66(0.67)	3.70(0.72)	6.11 **	13.50 **	2.31
自己調整尺度	3.03(0.88)	3.23(0.88)	3.44(0.93)	3.03(0.88)	3.22(0.87)	3.44(0.93)	3.42(0.93)	3.38(0.54)	3.57(0.74)	2.57 †	6.04 *	4.08 *

†; p<.10, *; p<.05, **; p<.01

研究5 PISA2018のデータをもとに,日本の高校1年生6,109名のデータを用いて,マルチレベルモデルによる分析を行った結果,知能を安定的で不変のものと捉える実体的知能観が高い生徒ほど読解力は低い傾向にあることが示された。また,学習方略を指導された経験の多い生徒ほど読解力が高い傾向にあることが示された。しかし,知能観と方略の被指導経験との交互作用は有意でなく,知能観と読解力の関係を学習方略の教授は調整しないことが示唆された。

以上のように,本研究から認知的スキルおよび社会情動的スキルを組み合わせた介入のあり方やその影響について様々な知見が得られた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計18件（うち査読付論文 7件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 15件）

1. 著者名 深谷達史	4. 巻 令和4年5月号
2. 論文標題 学習方略の活用を通して学びの自己調整を促す	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 教育研究	6. 最初と最後の頁 28-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 深谷達史 2023年	4. 巻 71
2. 論文標題 教訓帰納の活用を軸とした文章読解の個別学習指導 小学4年生を対象とした事例研究から	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 教育心理学研究	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Shiho Kashihara & Tatsushi Fukaya	4. 巻
2. 論文標題 Does a self-report questionnaire predict strategy use in mathematical problem solving among elementary school children? Importance of question format depending on the grade	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 European Journal of Psychology of Education	6. 最初と最後の頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/s10212-022-00668-z	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 成瀬陽奈子・深谷達史	4. 巻 29
2. 論文標題 英単語学習における動機づけの向上と 学習方略使用の促進を目指した介入研究 小学6年生に対する学習講座の実践から	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 学校教育実践学研究	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 栗原 慎二・池田いづき	4. 巻 29
2. 論文標題 教育的アプローチで虐待を受けた子どもたちを救えるのかーフィリピンの施設を参考にして	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 学校教育実践学研究	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 深谷達史	4. 巻 1244
2. 論文標題 「学び続ける主体」の育成 メタ認知の観点から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 学校教育	6. 最初と最後の頁 14-21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩本匡矢・深谷達史	4. 巻 28
2. 論文標題 Web調査に基づく小学校における漢字学習指導の実態 : 学習方略指導に着目して	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 学校教育実践学研究	6. 最初と最後の頁 9-16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15027/52339	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 青島拓紀・鈴木雅之	4. 巻 46
2. 論文標題 日本語版学習風土尺度 (LCQ-J) の作成	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本教育工学会論文誌	6. 最初と最後の頁 91-101
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15077/jjet.45084	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 鈴木雅之	4. 巻 67
2. 論文標題 メタ認知と学力の関係	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 指導と評価	6. 最初と最後の頁 6-8
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 真田 穰人・栗原 慎二	4. 巻 14
2. 論文標題 到達度評価による自己評価を取り入れた協同学習が児童の自律的学習行動と学習効力感に及ぼす効果	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 学習開発学研究	6. 最初と最後の頁 123-129
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15027/52289	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 中林浩子・栗原慎二	4. 巻 14
2. 論文標題 UDLを基軸にした授業改善による児童の変容に関する一考察：学習的適応感に着目して	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 学習開発学研究	6. 最初と最後の頁 75-83
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15027/52284	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 山本博樹・深谷達史・高垣マユミ・比留間太白・小野瀬雅人	4. 巻 59
2. 論文標題 説明実践に教育心理学は貢献してきたのか？ 説明研究からみた現状と課題	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 教育心理学年報	6. 最初と最後の頁 209-230
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.5926/arepj.59.209	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 松山康成・真田穰人・栗原慎二	4. 巻 69
2. 論文標題 友人同士の対立場面における介入行動意図尺度の作成	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 教育心理学研究	6. 最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.5926/jjep.69.1	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 松山康成・栗原慎二	4. 巻 13
2. 論文標題 他者理解を促進する「感情・体調共有ポケットチャート」の開発：新型コロナウイルス感染症流行下におけるミスコミュニケーション予防	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 学習開発学研究	6. 最初と最後の頁 79-85
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15027/50809	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 西垣伸悟・栗原慎二	4. 巻 27
2. 論文標題 フィリピンにおける虐待経験のある親の生活実態に関する調査：虐待防止プログラムの開発に向けて	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 学校教育実践学研究	6. 最初と最後の頁 169-175
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15027/50627	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 山田洋平・小泉令三	4. 巻 68
2. 論文標題 幼児を対象とした社会性と情動の学習 (SEL-8N) プログラムの効果	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 教育心理学研究	6. 最初と最後の頁 216-229
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.5926/jjep.68.216	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 深谷達史	4. 巻 58
2. 論文標題 子ども（学習者）の学びと大人（教師）の学び：わが国の教授・学習・認知研究の動向と展望	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 教育心理学年報	6. 最初と最後の頁 30-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.5926/arepj.58.30	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 深谷達史・栗原慎二・山崎茜・エリクソンユキコ	4. 巻 17
2. 論文標題 学習スキルと社会情動的スキルを高める介入法の開発と評価：児童生徒と学生を対象として	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 広島大学大学院教育学研究科共同研究プロジェクト報告書	6. 最初と最後の頁 27-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15027/47320	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 小泉令三・山田洋平・西山久子・松本有貴・宮崎昭
2. 発表標題 自治体規模での実践から学ぶ日本らしい社会性と情動の学習（SEL）実践とは？
3. 学会等名 日本教育心理学会第64回（2022年）総会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小角真歩・深谷達史
2. 発表標題 中学生はどのようなふり返しを行うか：学習内容と学習方法に関する記述の分析から
3. 学会等名 日本教育心理学会第61回総会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 鈴木雅之（藤原和政・谷口弘一（編））	4. 発行年 2021年
2. 出版社 北大路書房	5. 総ページ数 292
3. 書名 学校現場で役立つ教育心理学 教師をめざす人のために	

1. 著者名 深谷達史	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 188
3. 書名 教師のための説明実践の心理学（第11章 相互説明の力を担当）	

1. 著者名 利根川明子・鈴木雅之	4. 発行年 2019年
2. 出版社 北大路書房	5. 総ページ数 248
3. 書名 新・動機づけ研究の最前線（第7章 感情・ストレス研究アプローチを担当）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	鈴木 雅之 (Suzuki Masayuki) (00708703)	横浜国立大学・教育学部・准教授 (12701)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	山田 洋平 (Yamada Yohei) (60735687)	福岡教育大学・大学院教育学研究科・准教授 (17101)	
研究分担者	栗原 慎二 (Kurihara Shinji) (80363000)	広島大学・人間社会科学研究科(教)・教授 (15401)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関